

小児の行動異常と乳児栄養方法との 関連に関する研究—(3)

木村三生夫・杉森美代子・伊東 俊一

(東海大学医学部小児科)

牧田 清志・山崎 晃資・猪股 丈二

林 雅次・渥美真理子・松田 文雄

河野 貴子

(東海大学医学部精神科)

大塚 乙子 (神奈川県立厚木児童相談所)

はじめに

我々は、対人関係の基礎が、早期母子関係の中で形成されるという観点から、行動異常児の早期母子相互作用の在り方について調査を重ねてきた。早期母子相互作用の重要な要因の1つである母親の授乳行動と、その環境因子に焦点をあて、昭和55年度は、東海大学病院精神科児童外来を訪れた行動異常を示す子ども達を対象にアンケート調査を行ない、その結果を第一報として報告した。昭和56年度には、健常児を対象に同様のアンケート調査を行ない、行動異常児についての昭和55年度の報告結果との比較検討を行ない第2報とした。今回は、それらのアンケート調査をもとにして、さらにいくつかの環境因子を抽出しながら小児の行動異常と乳児栄養方法との関連についての検討をすすめた。

対象と方法

対象は、行動異常児群329名と、正常対照群702名である。行動異常児群は、昭和50年2月より、昭和55年8月までの間に、東海大学病院精神科児童外来を受診した1,074名の子どもたちのうち、アンケート調査に回答をよせた329名(30.6%)である。正常対照群は、1才6ヶ月健診を受診した355名と保育園児347名の計702名で、何らかの障害のある子ども達はふくまれていない。

アンケート調査項目は、授乳行動および環境因子についての21項目である(表1)。各項目についての統計学的検討は χ^2 検定によりおこなった。

結 果

1. 行動異常児群の診断別分類と年齢分布 (図1, 2)

行動異常児群の診断別分類は、神経症的発症(32.7%)、自閉症(29.3%)、脳器質障害(16.8%)、精神遅滞(10.2%)、発達性言語障害(6.7%)、その他(4.3%)となっている。また年齢分布は、図2に示すごとく、8-9歳と14歳以上にピークが認められる。

2. 授乳方法(表2)

昭和56年度は、人工単独栄養と母乳群の2群にわけて検討したが、今回は、生后少なくとも1ヶ月以上持続している授乳方法によって、母乳栄養、人工栄養、混合栄養の3型に分類し、正常対照群と行動異常児群との比較検討を行なった。その結果、自閉症群($p < 0.05$)、脳器質障害群($p < 0.01$)で、有意に人工栄養が多く、母乳栄養の少ないことが明らかとなった。その他の群では、正常対照群との間に有意差を認めなかった。

3. 授乳者(表3)

行動異常児群における授乳者は、自閉症群($p < 0.01$)、脳器質障害群($p < 0.01$)、精神遅滞群($p < 0.05$)で、正常対照群に比し、母以外の授乳者が有意に多かった。

4. 周生期RISK FACTOR

(1) 分娩時(表4)

神経症的発症群($p < 0.05$)、自閉症群($p < 0.005$)、脳器質障害群($p < 0.005$)、精神遅滞群($p < 0.05$)、発達性言語障害群($p < 0.05$)のすべての群で、正常対照群に比し有意にRISK FACTORの頻度の高いことが認められたが、

神経症的発症群においてもRISK FACTORの多いことは注目される。

(2) 新生児期(表5)

新生児期のRISK FACTORとして、新生児瘵れん、重症黄疸、ミルクの飲みの悪さ、体重増加の悪さ、頻回の発熱などをとった。行動異常児群のうち、神経症的発症群($p<0.05$)、自閉症候群($p<0.005$)、脳器質障害群($p<0.005$)、精神遅滞群($p<0.005$)で、正常対照群に比し有意にRISK FACTORの頻度が高く、神経症的発症群においてもRISK FACTORの頻度の高いことが注目される。

5. 離乳開始時期(図3)

行動異常児群における離乳開始時期は、各疾患群とも正常対照群との間で有意差は認められなかった。

6. 離乳完了時期(図4)

行動異常児群における離乳完了時期は、発達性言語障害群で正常対照群に比し、10ヶ月未満のものが有意に多かった。

7. 離乳状況(図5)

離乳の難易度については、障害児群の全ての群において、正常対照群との間に有意差は認められなかった。

8. 出生順位(表6)

行動異常児群における出生順位をみると、神経症発症群($p<0.01$)、脳器質障害群($p<0.05$)で正常対照群に比し有意に第1子の多いことが認められた。

9. 高年初産頻度(表7)

30才以上の高年初産については、行動異常児群と正常対照群との間に有意差は認められなかった。

考 察

第1に、授乳方法について、自閉症群および脳器質障害群で、正常対照群に比し有意に母乳栄養

が少なく人工栄養の多いことが認められたが、これは、自閉症の病因に中枢神経系の何らかの器質的要因が存在するという知見を考え合わせると、母乳栄養による授乳の困難性に、子どもの側の障害(愛着行動の障害、吸乳力の低下など)が影響を与えていることが推測できる。

第2に、神経症的発症群では、授乳方法の偏りはみられず、“授乳方法”という因子のみをとって、情緒発達過程における早期母子相互作用の病因論的意義を明らかにすることはできなかった。

第3に、授乳行動そのものよりも、授乳行動をとりまくさまざまな因子に行動異常との関連が認められた。1つは、分娩時、新生児期の周生期RISK FACTORが、神経症的発症群においても多く認められたことである。これは神経症的発症群では、器質性障害は明らかでないものの、周生期において子どもに何らかの異常があり、その子どもをとり扱う場合の困難性があったであろうことが推測された。そして、このことは、母親の養育態度になんらかの影響を与えた可能性があると思われる。また神経症的発症群においても、第1子の多いことが認められた。子どもが第1子であることが、“MOTHERING”を行う母親の“親として”の能力の未熟性を示すと考えれば、第1子であることは、早期母子相互作用にはマイナスに働く因子となり得るものと推測される。すなわち、核家族化がすすんだ現代社会の中での母子相互作用における第1子の意義が再検討されなければならないであろう。そして第1子であるということは、子どもの情緒発達においてなんらかの意味をもってくるのではないかと考えられる。

以上の3点から、精神発達過程における早期母子相互作用の問題を考えてきたが、今後は早期母子相互作用を示すより鋭敏な因子を探りながら、母子相互作用の力動的全体像をPROSPECTIVEな方法を用いて、継時的に検討していきたいと考えている。

表1

アンケート質問項目

(1) 生年月日	(12) 出産場所と時間
(2) 性別	(13) 分べん時間
(3) 家庭内養育者	(14) 出産経緯
(4) 身体発育状況	(15) 新生児の状態
(5) 既往歴	(16) 授乳方法
(6) 利き手	(17) 産前産後の協力態勢の有無
(7) 小児の社会的状況(現在)	(18) 授乳環境
(8) 妊娠中の状態	(19) 離乳について
(9) 分べん時の状態	(20) 家族構成
(10) 在胎週数	(21) 住居について
(11) 出産時入院日数	

表2

疾患別授乳法

	母乳	混合	人工	
正常対照群	290	213	194	
神経症的 発症群	41	28	34	
自閉症群	28	32	37	*
脳器質 障害群	14	13	27	**
精神遅滞群	15	5	13	
発達性 言語障害群	6	5	10	

* P < 0.05

** P < 0.01

表3

授乳者

	母	母以外	
正常対照群	694	6	
神経症的 発症群	105	1	
自閉症群	92	5	**
脳器質 障害群	49	6	**
精神遅滞群	31	2	*
発達性 言語障害群	21	1	

* P < 0.05

** P < 0.01

表4

RISK FACTOR (分べん時)

	無	有	
正常対照群	523	173	
神経症的 発症群	69	34	*
自閉症群	54	43	***
脳器質 障害群	32	24	***
精神遅滞群	19	14	*
発達性 言語障害群	11	10	*

* $P < 0.05$ *** $P < 0.005$

表5

RISK FACTOR (新生児期)

	無	有	
正常対照群	600	66	
神経症的 発症群	78	25	*
自閉症群	72	25	***
脳器質 障害群	31	25	***
精神遅滞群	20	13	***
発達性 言語障害群	18	4	

* $P < 0.05$ *** $P < 0.005$

表6

疾患別出生順位

	第一子	第二子以下	
正常对照群	279	388	
神經症的 發症群	65	39	**
自閉症群	40	57	
腦器質 障害群	31	22	*
精神遲滯群	14	7	
發達性 言語障害群	9	12	

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$

表7

疾患別高年初産頻度

	30歳未満	30歳以上
正常对照群	227	52
神經症的 發症群	51	14
自閉症群	32	8
腦器質 障害群	48	5
精神遲滯群	12	2
發達性 言語障害群	7	2

対象児 (N= 329)

診断別分類

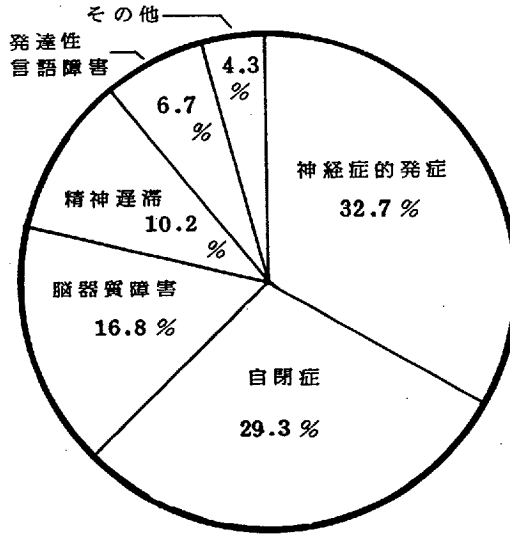


図1

対象児 (N= 329)

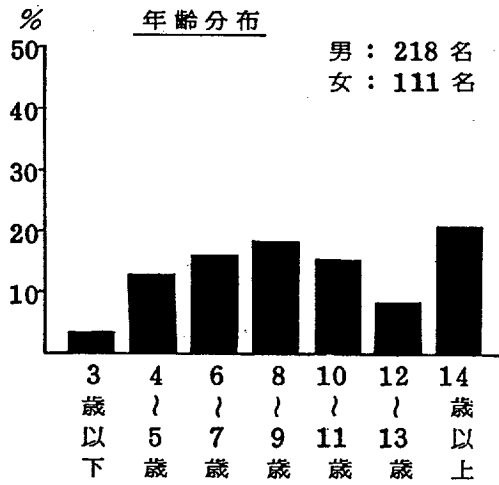


図2

離乳開始時期

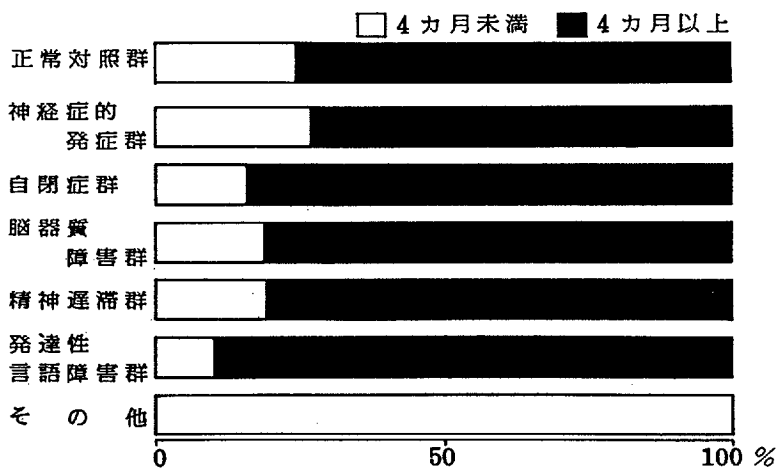


図 3

離乳完了時期

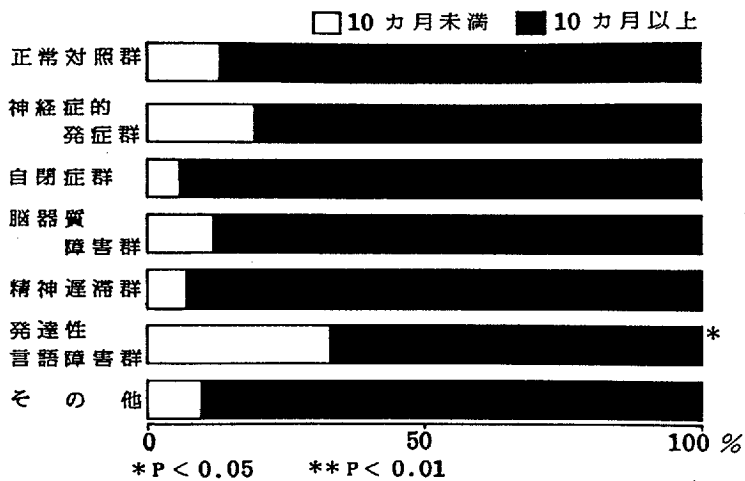


図 4

離乳状況

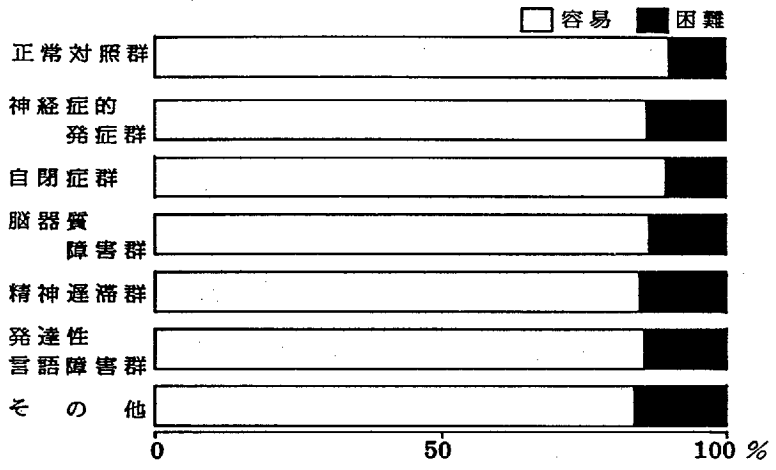


図 5



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

我々は、対人関係の基礎が、早期母子関係の中で形成されるという観点から、行動異常児の早期母子相互作用の在り方について調査を重ねてきた。早期母子相互作用の重要な要因の1つである母親の授乳行動と、その環境因子に焦点をあて、昭和55年度は、東海大学病院精神科児童外来を訪れた行動異常を示す子ども達を対象にアンケート調査を行ない、その結果を第一報として報告した。昭和56年度には、健常児を対象に同様のアンケート調査を行ない、行動異常児についての昭和55年度の報告結果との比較検討を行ない第2報とした。今回は、それらのアンケート調査をもとにして、さらにいくつかの環境因子を抽出しながら小児の行動異常と乳児栄養方法との関連についての検討をすすめた。